

1

三離れ(葬式離れ・墓離れ・寺離れ)のなかで

平成14年(2002)、立教開宗七五〇年が終わり、しばらくすると、「三離れ」ということばがささやかれるようになった。今、ふりかえるとそれは奇しくも、日本が初めて経験する人口減少時代の始まりのころであった。

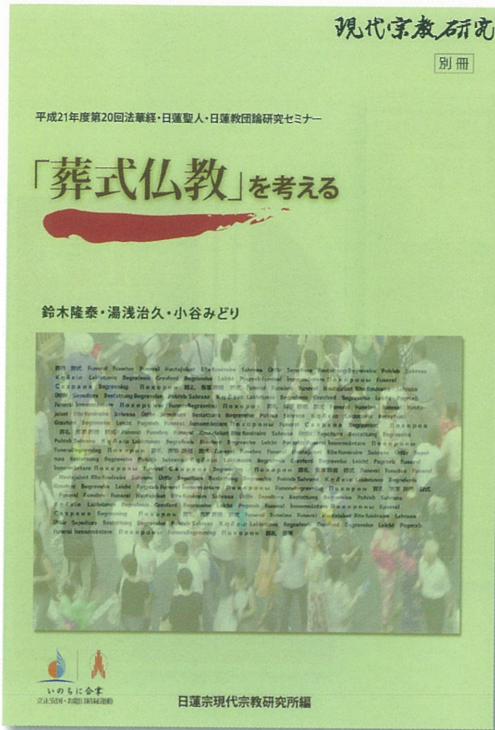
平成22年2月開催された第20回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論セミナーの内容をまとめた『「葬式仏教」を考える』(日蓮宗新聞社 平成23年)には、次のように述べられている。

昭和時代の戦後を代表する知識人のひとりである作家・司馬遼太郎は、我が国の「葬式仏教」について、「本来の仏教」(『春灯雑誌』)からすると「信じがたいこと」であると述べ、未開時代以来の民間信仰が衣をきてお経を読んでいるだけにすぎないとして日本仏教を酷評している。(巻頭言)

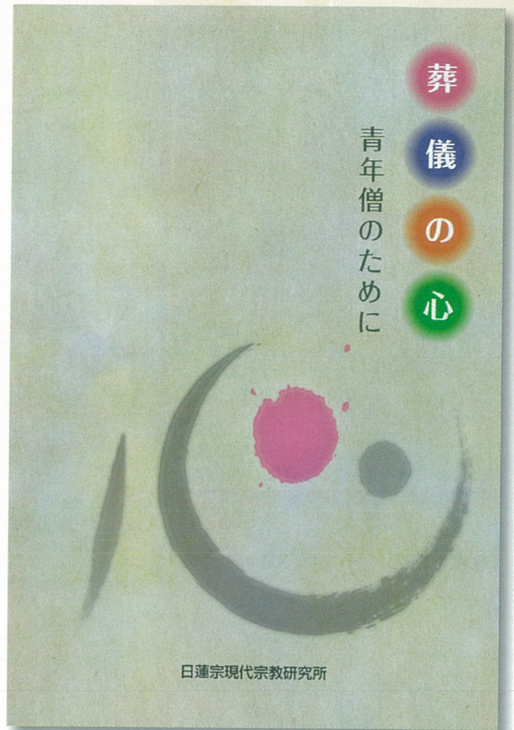
「葬式仏教」とはそんなに無価値なものなのか、「葬式仏教」の本来の面目とは如何なるものなのか。「葬式仏教」についての批判は批判として受け止め、「葬式仏教」に対する危機感を共有しつつも、日本仏教の立ち位置としての「葬式仏教」を再評価したい。そんな思いから、このセミナーを企画いたしました。(後記)

さて、セミナーの中で、「インドの仏教出家者」と葬儀とのかかわりについて、鈴木隆泰師(山口県立大学教授・善應院住職)は、次のように発言している。

律を詳しく読めば(略)やっていたのです、サンガの中で。同僚のお坊さんが亡くなったときに仲間内でやっていたのです。ですから、「出家者が葬儀にかかわるな」「携わるな」というのはまず明確な誤解であることがわかります。ただし、インドの仏教出家者たちは、同僚の人たちの葬儀はやっても、在家者の葬儀は絶対できなかったのです。(略)そのようなジレンマがありました。



『「葬式仏教」を考える』
 (日蓮宗新聞社／平成22年12月8日発行)



現代宗教研ブックレット『葬儀の心～青年僧のために』
 (平成23年7月16日発行)

葬式をしているということは決して仏教の墮落でも変質でもありません。(略) 日本で仏教が根づくためには、葬式と一緒にする必要があったのです。死後の安心、死後にきちんと祀って、よい先祖、ご先祖さまになっていただく、それが日本人の一般的な他界観です。そこで仏教というものが重宝されたのです。

小谷みどり氏（第一生命経済研究所主任研究員）は次のように述べている。

葬式仏教だけではいけない、あるいは葬式仏教ではいけない、だからお寺は社会活動しなければいけないのではないかという議論もあります。私はこの考え方というのは必ずしもそうではないのではないかと考えております。(略) 社会活動に手を着けるよりも葬式仏教を十分なものにして行くのが先ではないかというのが私の議論であります。

そのうえで、小谷氏は、葬式仏教の現状を次のように指摘している。



『教化学研究』1号、2号、3号

僧侶が「死後は任せろ」と言って安心させてあげていただきたい。そのためには、僧侶への信頼、人間関係ができていなくてはいけません。でも、実際には死に直面したときにお坊さんが役に立つと思っている人はほとんどいないわけです。それを考えると、今の葬儀式だけの葬式仏教だけでなく、本当の意味での葬式仏教を機能させることが世の中のひとたちから今、求められていることであり、それが仏教の大きな役割であると思います。

この五、六年の間、各地の教化研究会議や研修会に鈴木師や小谷氏が招かれることが多かった。私たち教師は、小谷氏のいう「本当の意味での葬式仏教」を勤めるようになったかどうか、今一度、かえりみるときではなかろうか。

先祖供養と新宗教

葬式仏教をテーマに開催された法華経・日蓮聖人・日蓮教団論セミナーでは、各講師より、僧侶が葬儀へ関わることへの偏った見解の解消と、これまでの葬儀への見直しと、遺族の心によりそうことの大切さを気づかされ、励まされるものでした。

かつて、江戸から明治へ、また戦争からの復興へと時代が大きく変わる際、多くの新宗教と呼ばれる信仰集団が生まれ、そのなかには法華経・日蓮聖人に縁を持つグループもありました。

これら法華系新宗教では、我々と同じようにお題目を唱えています。また、釈尊＝久遠実成本師釈迦牟尼仏を本尊としているグループもあります。しかし、あるグループにおいては、日蓮聖人は法華経をひろめた先師の1人としてみられるのみで、かれら教団の創始者たちを信仰しています。日蓮聖人を特別な存在と考えていないのです。

彼らに共通しているのは、法華経信仰と先祖供養です。この2つの特徴は、歴史的に見ても日蓮聖人以前から、伝統的に日本人の信仰を形成してきたものです。人間の素朴な生活要求に対応する現世利益信仰であるといえます。いわば日蓮聖人の宗教がなくても成立するものです。

現世利益を説くことそのものは否定されるべきものではないでしょう。しかしながら、それだけが日蓮聖人の思想の本質ではありません。聖人は立正安国、すなわち正法（法華経）を立てて国家（そこに住まう人々・社会・環境）を安らかにしたいと願われました。個人の幸せで満足していたわけではありません。万人の幸せを願い、この世を仏土にしようとしたのです。

また、このような違いとは別に、原始仏教といわれる教えや弥勒信仰をとりいれている教団もあります。

しかしながら、彼らが時代の要求に応える形で生まれて来た経緯を考えれば、我々自身も葬儀や先祖供養について、今一度、襟を正して臨みたいものです。

消費者目線の「葬式仏教」を超えて

「葬式仏教」という蔑称が生じた一因は、高額な「戒名料」や布施を要求する事例が散見することに加え、現代の人々があまりにも消費者目線になってしまい、本来はコスト・リターンという枠組みで考えるべきでない宗教の分野まで、その観点で考えてしまうことにあるでしょう。以上の点については、高額な布施等の要求は論外ですが、僧侶側からも布施や法号の宗教的・倫理的意義を伝え、かつ、経済至上の強欲で即物的な価値観では真実の幸福は得られない、ということを教化していくしかありません。

「葬式仏教」が蔑まれるのは「葬式」との関わり方についての問題であって、「仏教」自体は依然として、ゆるやかではありますが、人々の敬意のもとにあることを忘れてはいけません。我々僧侶は、伝統的にこの国に醸成されてきたお寺や僧侶への信頼感という遺産、いわゆる「衣の力」で生かされていることをまず銘記すべきです。「葬式仏教」という批判が出るということ自体、かろうじてまだ「仏教」に期待と尊敬が残されていることを示しています。こんな状況であってもいまだに、宗教者に期待が寄せられているのです。

であれば、私たちは遺産を食いつぶすのではなく、世間の尊敬と期待に真っ向から答えられる教師にならなくてはなりません。そこでは、教師一人一人の倫理観・教養・知性・人間力が問われます。人々を導くためには、相手に応じて方便を駆使するための知識や智慧が必要です。ときには、信仰へ誘引するために現世利益を示す必要もありますが、その際には、本当の目的を見失わずにそこに導くだけの知性が要求されます。加えて当宗の教師は、成仏とは何か、真の幸福とは何なのか、ということを真摯に考究し、具体的な生き方の一分として具現させなくてはなりません。その根底には、もちろん、すべての衆生を成仏に導き真実の幸福を得せしめるものは、私たちが弘めるお題目しかない、という確信があります。

葬儀や供養の意義、悲しみの救済、そして人生における真実の幸福。これらを真摯に考え教化の努力を怠らない、そのような尊敬できる僧侶が堂々と葬儀を奉行したならば、「葬式仏教」という批判はもとより生じるはずはないのです。